

千畝の記憶

岐阜からたどる足跡

第2部 立志編 ③

「皆さん、これから、日本通過ビザを発給します！」。舞台俳優上田定行(56)の力強い声が、満席のホールに響いた。

今年3月、名古屋市中区栄の宗次ホールで開かれた「命のビザコンサート」。クラシックと語りで杉原千畝の生涯を紹介した。

企画した総括支配人野間晴久(62)は「千畝さんは名古屋に10年近くいた。ゆかりの偉人を知ってもらいたかった」と話す。チケットは発売早々に300席が完売する人気だった。

同ホールは、カレーチェーン店「COCO壱番屋」を創業した宗次徳二が2007年に開設した。支配人は同社の黎明期から融資で

良心を育んだ校風



旧制愛知県商業学校の講堂として1924年に建てられた「感喜堂」を前にする森重統さん。杉原千畝氏が学んだ当時の雰囲気は今に伝える＝13日、名古屋市瑞穂区、瑞陵高

母校の高校、戦時中も「自由」貫く



野間晴久さん

支えた縁で、岐阜信用金庫から受け入れており、野間は出向時代を含め8年前からホールを任されている。本部融資部で審査役をしていたころは、「恥ずかしながら千畝さんを知らなかった」という。コンサートを企画するようになって世情に敏感になり、テレビの

特集に着目。上田さんに脚本を依頼した。

1年かけた準備の中で、千畝の母校瑞陵高(当時の愛知県立第五中学)を訪ねた。「古い建物や残された資料、同窓会組織に伝統を感じた。OBも誇りでしょうね」

その瑞陵高は熱田神宮の約2キロ東、瑞穂区の住宅街にある。千畝は名古屋市立古渡尋常小(現在の平和小)を卒業し、1912年に入学した。

「運動場の周囲一杯に作られた尾張大根」と千畝が書き残したように、当時はのどかな風景の中にあり、「ダイコン中」とやゆされたことも。だが、学力は当時から同県内トップクラス。ライバルの一中(現在の旭丘高)に比べると、のんびりとした自由な雰囲気だったという。

元教頭で同窓会「瑞陵会」の事務局を務める森重統(66)は「後の戦時中、生徒を予科練などに行かせず、

回卒の医師が訴えたという記述からも、独自の気風がうかがえる。

瑞陵高は、杉原ウィークに合わせた加茂郡八百津町の短歌大会への応募や、ゆかりの地を訪れる事業を続ける。愛知県が昨年12月、校内に記念建造物建設の検討を表明し、名古屋市も平和小から同高までの通学路4.5キロを「人道の道」として銘板設置を準備するなど、顕彰は広がりを見せている。

その時 岐阜は

1912(明治45、大正元年)7月30日に明治天皇が崩御し、元号が大正に。31日付岐阜日日新聞は「聖上崩御」と一面で伝えた。岐阜市内の各戸や電車には弔旗が掲げられ、銀行は臨時休業、金津廊(くるわ)も歌舞音曲を止めるなど市中全体が喪に服した様子を紹介した。白川村大火(57戸焼失)や県内死者128人の風水害もあった。

敵性語になった英語もすっかり学ばせたと聞く。千畝さんの枠にとられない判断は、こうした校風で養われたのかもしれない。

百周年記念誌によれば、35年に都内で開かれたOB会で作家の江戸川乱歩(1回卒)と千畝(6回卒)が同席。深夜まで続いた語らいで、「事なかれ主義を排し、熱と押しが必要」とい

今も非常勤で歴史を教える森は「戦時色が強まる中で良心に従って生きたのは大変なことだったろう」と推し量る。その上で、「実際の社会では、良心を貫きたいと思ってもなかなかできない。千畝さんを通して、生徒たちがそういう判断ができるきっかけ作りができればいい」と考えている。

敬称略(堀尚人)